

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

レッド・ドラゴン

配給/UIP

2003 (平成15) 年4月22日鑑賞

Data

監督: プレット・ラトナー

出演: アンソニー・ホプキンス/エ

ドワード・ノートン/レイ

フ・ファインズ/ハーヴェ

イ・カイトル

👁️👁️ みどころ

ご存知、ハンニバル・レクター3部作(シリーズ)の第3作の登場。あの名作『羊たちの沈黙』からもう11年も経っているとは驚きだ。今回のFBI捜査官は男性のグレアム。グレアムとレクターとの知能戦、そして複雑な人間性をもった凶悪犯レッド・ドラゴンとの三つ巴の戦いはスリリングで面白い。「第4作」にも期待・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<『羊たちの沈黙』、『ハンニバル』、そして『レッド・ドラゴン』>

ジョディ・フォスターが演じたFBI女性捜査官クラリスを一躍有名にさせ、アカデミー賞主要5部門を獲得した『羊たちの沈黙』から11年。第2作『ハンニバル』を経て、今第3作『レッド・ドラゴン』が公開され、ハンニバル・レクター博士を演ずるアンソニー・ホプキンスが三たび登場した。

<プロローグその1>

まず、「プロローグその1」が面白い。

犯罪心理学者ハンニバル・レクター博士は、今日は交響楽団の演奏を楽しみ、その団員たちを招待して、ごちそうを振る舞っていた。毎年のお楽しみ行事だ。その食事の席上、行方不明となった団員の話題が出るが、「正直、彼がいなくなってよかったと思っているよ。彼の演奏はひどかったからね」という本音の言葉も。

そしてレクターが振る舞う料理のうまさに、「この料理の材料は何?」と聞く客。これに対しレクターは「言えば食べられなくなるでしょう・・・」との謎めいた答え。笑いな

らこれを口に運び、微笑みかける来客たち。このような会話も本来はおいしい「ソース」になるはずだったが・・・。

実はこの料理は×××だった。

＜プロローグその2、レクターの逮捕＞

第3作『レッド・ドラゴン』には、FBIの女性捜査官クラリスを演じた『羊たちの沈黙』におけるジョディ・フォスターや『ハンニバル』におけるジュリアン・ムーアのような魅力的な女性は登場しない。第3作に登場するFBI捜査官は男性のウィル・グレアム（エドワード・ノートン）。すごく知的で魅力的な男だ。そしてグレアムが追いかける凶悪犯（レッド・ドラゴン）はフランシス・ダラハイド（レイフ・ファインズ）。レクターはいわば相談役という地位だ。

この構成を明確にするため、プロローグその2は次のように展開されるが、この冒頭シーンは大いに迫力がある。

- ①「人食い」殺人鬼を追っていたFBI捜査官グレアムは、犯罪心理学者ハンニバル・レクターの応援を受けていたが、同時にレクターを疑っていた。
- ②そしてある日、グレアムが自分の推論をレクターに打ち明けている時、遂に決定的な証拠をつかんだ。
- ③しかしその時、レクターのナイフがグレアムの胸に。グレアムはこれに反撃、そしてピストルを発射した。

2人ともこれで死亡・・・してしまったのか・・・？

＜字幕と音楽が流れる中、本編のストーリーへ＞

プロローグが終わり、字幕が流れ始めると、何とも無気味だが印象的な音楽が流れてくる。そんな中スクリーンでは、

- ①「カニバル（人食い）ハンニバル」と呼ばれた殺人鬼ハンニバル・レクターが逮捕されたこと。
 - ②裁判では、当然のようにレクターは有罪となり、終身刑を宣告されて、今はボルティモア州立病院精神科に入っていること。
 - ③他方、レクターとの「死闘」で瀕死の重傷を負い、精魂尽き果てたグレアムも、FBIを退職したこと
- を矢つぎ早やに表示していく。

これが終わると、画面はフロリダ州マラソンの海辺だ。グレアムはここに自宅を構え、妻と息子3人で、静かなヨット遊びの日々を過ごしていた。

＜グレアム捜査官の再登場＞

ここを訪れたのはかつての上司であるクロフォード（ハーヴェイ・カイトル）。バーミングハムとアトランタの2カ所で、幸せな家族を襲った残忍な連続殺人事件が発生した。その手口は被害者の目の中に鏡の破片を差し込み、噛み傷を残すという残忍で猟奇的なもの。しかも妻は夫や子供たちが見ている前で弄ばれた挙句に殺されていた。

「この2つの事件はきっと同一犯人によるものだ」、そう確信しながら、FBIもそう簡単に犯人像を割り出すことはできなかった。そこには、かつてレクターを逮捕に追い込んだグレアム捜査官の卓抜した知性と推理力、イマジネーションの能力が必要だった。

「今はもうFBIを引退しているから・・・」と固辞しながらも、グレアムはこの犯人像に興味を持ち、自分が果たすべき役割を自覚せざるを得なかった。

＜今回の凶悪犯はレッド・ドラゴン＞

今回の凶悪犯レッド・ドラゴンの人物像は当然ながら複雑だ。ストーリーの展開の中でも簡単には見えてこないが、少しずつ明らかになる犯人像は、背中に赤いドラゴンの入れ墨をした強靱な肉体をもった精悍な男。彼は今職場の中で孤獨な変わり者と見られている人物だ。そして、幼い頃に受けた虐待や女性に対する劣等感などさまざまな要素が、通称ミスター“D”ことフランシス・ダラハイドを凶悪犯に仕立て上げていった・・・らしい・・・。

この連続殺人事件の犯人像の分析が、グレアムの任務だ。彼は現場に残された血痕や写真を分析し、推理力を働かせ懸命に考えた。しかしその分析や推理が行き詰まった時、グレアムもそして上司のクロフォードも、あのレクター博士の意見を聞かざるを得なくなった。すなわち、『羊たちの沈黙』におけるクラリス捜査官とレクター博士との関係と同じようなグレアムとレクター博士との関係が生じることになったのだ。2人の間で交わされる犯人像をめぐっての会話の重みとかけひき、知能の限りを尽くした合理的な推理と推論、そしてFBIによる緻密な証拠収集というドラマの展開は、スリリングで実に面白い。さすがハンニバル・レクター映画の第3作だ。

＜果たして第4作はあるのか＞

レッド・ドラゴンを追いつめていくストーリーを書くのはヤボというもの。従ってここでは一切触れないが、とにかくこの映画が第1級の「娯楽作品」であることは間違いない。よく第1作から第3作までを「ハンニバル・レクター」3部作（あるいはシリーズ）と呼ばれているが、実は本当の3部作やシリーズではなく、かなりこじつけたものだ。

この映画の最後のシーンで、レクターに「美人のFBI捜査官が面会したいそうだ」と伝えるところなどは「ミエミエ」ながら、かえって面白い。

だから、どうせ無理してつないでいるのなら、是非次の第4作の構想を練ってもらいたいと思う。せつかくのハンニバル・レクターのキャラクターを生かさない手はないと思うから。そしてまた私としては、第4作には、是非また美人のFBI捜査官を登場させてほ

しいものだが・・・。

2003(平成15)年4月23日記